

公共育成牧場における草地更新作業の簡略化検証：

岡山県備中県民局畜産第一班 大坂文美恵

高梁市山間部に位置する公共育成牧場では 34 枚、18ha の草地で自給飼料生産が行われているが、近年は労働力の問題から思うような草地更新作業ができず、生産性が低いままの圃場が多く見受けられるようになってきている。更新面積拡大に向け、更新時の負担が最も大きい播種前耕起作業の簡略化について R5 からの 2 年間で検討。慣行作業の耕起深 8cm（慣行区）を対照として、表面を浅く攪拌する程度の浅耕区、播種前耕起を行わない不耕起区の 3 区を比較。その他の作業は慣行のままとした。草種は R5 更新のイタリアンライグラス（IR）、R6 更新のヒエを対象とした。ヒエは浅耕区と不耕起区のみ実施。IR では初期生育にばらつきはあったものの、単位収量は 2.3t/10a 前後で区間に大きな差は見られなかった。IR に続いて実施したヒエでも同様の結果が得られたことから、今回の栽培体系では浅耕或いは不耕起での作業の簡略化が通年で利用可能と考えられた。